

ALSの人による「口文字盤」の社会的相互行為分析

——在宅における医療的ケアとコミュニケーション——

○北星学園大学 水川喜文

1. 目的

本研究は、医療的ケアを受ける ALS (Amyotrophic Lateral Sclerosis, 筋萎縮性側索硬化症) の人による、一つのコミュニケーション方法(「口文字盤」)に関して、エスノメソドロジーや会話分析の知見を用いて、社会的相互行為の分析を行うことを目的とする。

2. 方法

本研究では、「口文字盤」の場面に対して、エスノメソドロジーと会話分析の方法論を用い、特にシーケンスの組織化、成員カテゴリーの使用、参加者の方法的知識に注目して分析する。

生活支援行為としての医療的ケアを受けようとする ALS の人にとって、人工呼吸器を装着する際の大きな問題の一つは、その疾病の段階において声によるコミュニケーションが困難になることである。それを補うため、コンピュータを利用したもの(AAC など)を含め様々なコミュニケーション法が行われている。「口文字盤」と呼ばれる方法(橋本 2009)は、五十音図が書かれた「透明文字盤」を視線で追って行う方法から派生したコミュニケーション法である。「口文字盤」によるコミュニケーションは、次のように進められる。障害当事者が「あ行」(母音)の口の形をして(例:「う」)、介助者がその母音の行を順番に発声して(例:「う・く・す・…」)、当事者がマバタキなどで合図をして一文字が確定する(例:「く」)。これを継続することによって、ひとつの発話をつくり出す。

本研究では、在宅で医療的ケアを受けて生活する ALS の人とその介助者等の「口文字盤」を用いたやりとりをビデオ撮影してデータとした。3名の ALS の人とその介助者等の協力を得て、当事者、介助者、調査者等の会話する場面を中心に映像データを得た。なお、この調査の許諾に関しては、当事者と介助者等に書面による調査承諾書をいただいた。

3. 結果

「口文字盤」は、介助者との共同的知識や相互行為上のさまざまな方法の熟達が前提となるため、介助者との継続的関係や日常的知識の積み重ねが必要であることが明らかになった。

第一に、介助者による理解の不達成場面の考察より、共同的知識のあり方、特に予期による解釈・解釈の不在の可能性が示唆された。第二に、理解の不達成を介助者がトラブルとして認知して、修復する過程に、介助者独自の技法との関連を見ることができた。第三に、発言が途中または断片的な場合に言葉を補うやりとりにより、(個別、あるいは一般的な)前提的知識の利用が見られた。これらにより、「口文字盤」による相互行為は、当事者と介助者による継続的関係(自薦や専任などによる)に基づく「方法的知識」の実践によるものであることが示された。

○本研究は、科学研究費助成研究(挑戦的萌芽研究)「在宅における医療的ケアの実践と論理——エスノメソドロジー・会話分析の視点から——」の一部である。

文献

安達 俊祐, サトウ タツヤ, 日高 友郎(2011)「ビジュアル・エスノグラフィーを用いた ALS 患者のコミュニケーションの理解」『立命館人間科学研究』22:57-71, 立命館大学

橋本操 (2009)「橋本操～口文字盤～」<http://www.youtube.com/watch?v=0bHT7wxUwCw>(2013年6月20日閲覧)

立岩真也(2010)「異なる身体のもとでの交信・過去～現在 : 主に不動系の人々の」
<http://www.arsvi.com/d/c07h.htm>(2013年6月20日閲覧)

天島大輔(2012)『声に出せない あ・か・さ・た・な』生活書院